

五輪主会場 スタート切れず

市民・建築家 反対相次ぐ

新国立競技場の建設計画

2020年東京五輪の主会場となる新国立競技場の建設計画が、二転三転している。8万人を収容する巨大な施設に「税金を使いすぎ」「景観が悪化する」と市民らが反発。国は縮小に向けて検討を進めるが、費用負担をめぐり国と東京都のすれ違いも続く。

「狭い敷地に巨大な競技場を建てるのはおかしい」。新国立競技場の見直しを求める市民団体が25日、文部科学省を訪れた。

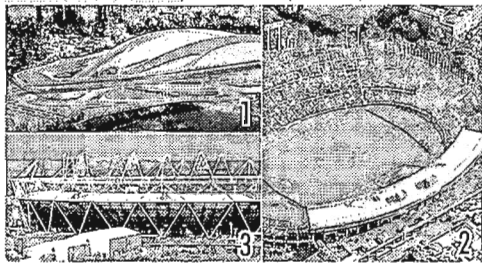
大会計画では、8万人収容の新競技場は延べ床面積が現在の5・6倍の29万平方メートル。屋根は開閉式で高さ

70メートルになる。周辺の日本青年館や都営住宅を壊して敷地面積は11・3倍になる。市民団体には作家の森まゆみさんらが参加。①高さ

70メートルは都が景観を守るために元々設定した高さの4・6倍にもなる②建築費が高くて維持管理費もかさむ③敷

新国立競技場計画と他の競技場

	観客席人	敷地面積ha	延べ床面積平方メートル
新国立競技場 1	8万	11.3	29万
現国立競技場 2	5万4千	7.1	5万1500
東京ドーム	4万6千	4.7	11万6500
ロンドン五輪スタジアム 3	8万	16.2	10万8500



延べ床面積は建物の各階の面積を合わせた面積。「横総合計画事務所」調べ

新競技場は19年9月のラグビーW杯で初めて使われる。建設に3年半かかる見込みで、15年10月には着工する必要がある。

負担国と都が綱引き

現行計画への反対意見は相次いでいる。建築家の横文彦氏は8月、「緑豊かで歴史的な文脈の濃密な風致地区が損なわれる」と問題提起。五輪決定を機に注目が集まり、11月、建築家ら

地いっばいに建ち、災害時の観客誘導など安全面に不安がある——と訴えている。

ずさん 前代未聞

五十嵐敬喜・法政大教授（公共事業論）の話 建物の大幅変更がないのに総工費がこの規模で倍以上も変わるのは前代未聞だ。土木工事と違って、建物の建築は事前に詳細な費用計算が可能だ。計画のずさんさだけでは説明できず、税金を使った事業である以上、計画作成の経緯や国際コンペの方法など情報をすべて開示して説明すべきだ。

当者は「遅れを取り戻せなければ、間に合わなくなる」と焦りを見せる。国立競技場を管理する文部科学省の外郭団体、日本スポーツ振興センター（JSC）は26日に有識者会議で削減案を示し、月内に計

建設費 1300億円→3000億→1800億？

新競技場はJSCが「世界一のスタジアムを作る」と掲げてきた。

1958年完成で64年東京五輪の主会場だった現競技場は、陸上トラック数が国際主要大会を開く基準を満たしていない。16年五輪招致では東京臨海部に都が1千億円で競技場を新設する計画だったが、IOCに交通の便の悪さを指摘され、20年招致で建て替え構想が浮上した。

JSCは12年3月、有識者会議を設けて8万人収容などの基本方針を決め、同年7月、建設費1300億円でデザインを公募。46案から、イラク出身で英国在住の建築家ザハ・ハディド氏の作品が選ばれた。

しかし複雑なデザインにJSC内部でも「1300億円ではとても無理」との声があった。五輪招致成功後にJSCが改めて業者に見積もりを依頼すると最大3千億円と試算され、文科省は見直しを迫られた。

JSCは基本方針を決めた議論の詳細を明らかにしていないが、「8万人規模はラグビーW杯や将来誘致が想定されるサッカーW杯を考えれば必要」とする。

下村博文文科相は施設縮小で建設費を1800億円にする案を示し、開閉式屋根について「五輪だけ考えればいけない」と話すなど見直しを検討する。

画を固める。財務省は今年度補正予算案に、現競技場の解体費や新競技場の設計費など約230億円を盛り込む方針だ。

ただ、国と都の費用負担を巡る課題は解決されていない。今月、競技場の周辺整備の一部を都が負担することで合意したが、どこま

京発余皮火山観測二ヶ月

を設置する穴を掘るには精

った。

（中村真理、岡雄一郎、阿久津篤史）